

森を動かす。

世界を担う知の拠点へ

濱田純一

The
incumbent

「森を動かす」。この言葉で、「マクベス」や「指輪物語」の世界を語ろうとしているわけではありません。国立大学法人化後の5年の間に、東京大学は、佐々木元総長時代には法人化に対応するための確実な制度や仕組みの整備を、そして、小宮山前総長時代には法人化がもたらした可能性への大胆なチャレンジを行ってきました。そうした基盤の上に、いま国立大学法人化による改革は、その土壌づくりと「木を動かす」段階から、「森を動かす」段階に入ったという状況認識を、私は申し上げたいと思います。法人化後の仕組みやその可能性を存分に活用することで、東京大学の基底から湧きあがる力を最大化し、かつそれを持続可能なものとしていく、つまり「森を動かす」という課題が、私の6年の任期中のバックボーンとなると考えています。

東京大学は、世界の知の頂点を目指して研究水準を一層高め、日本と世界の学術の発展に中核的な役割を果たしていくことが求められています。また、教育を通じて、日本だけでなく世界の至る所で、東京大学で学んだ知を生かして活躍し、人類の未来を支えていく人材を育てていきたいと考えています。さらに、社会との幅広い連携を通じて、東京大学の知は社会に活力をもたらし、また相互の交流によって、より豊かな知が生み出されていくはずです。

知の創造と教育、社会との連携を通じて、東京大学は、日本の未来、世界の未来に対する公共的な責任を、いまこそ果たすべき時であると考えています。私は、東京大学を、豊かな構想力を備えた「世界を担う知の拠点」として、いつそう発展させていく決意でいます。

「未来に向けた確かな指針」

時代はいま、大きな変化の時期を迎えています。金融や産業が世界的規模で動揺する中で、人々の生活の基盤も揺らぎ、社会は未来への確かな指針を待ち望んでいるように思えます。この危機が克服された後の世界は、決して危機以前の状態に戻るということではないでしょう。人類の知識や知恵は、この危機から学び、誰もがより快適に安心して生活できる社会の姿を生み出していくはずです。

そのような新しい世界を描き、それに至る道筋を提示することが、いま学術に求められています。東京大学においては、人間の存在や生命現象の仕組み、さらには宇宙や物質の成り立ちに対する根源的

な研究、また、人々の社会生活を支える科学技術の開拓や制度・理論の構築など、幅広く多様な学術研究が行われてきました。そして、それらの研究を基盤として、未来の社会を担うべき優れた人材が育成されています。

日本の国民に支えられる国立大学法人である東京大学は、こうした学術研究と人材育成を通じて、未来への確かな指針を示し、国民に対する責任を果たしていくつもりです。そして、世界の人々の福利に寄与することを通じて、日本に対する信頼と敬意を高める役割を担いたいと考えています。

「厚み」のある教育。「タフ」な東大生

東京大学の教育は、リベラル・アーツの幅広い学習と深い専門的知識の習得との効果的な組み合わせを目指しているところに、大きな特徴があります。教養教育、専門教育ともに、さらなる質の洗練を続け、総合研究大学としての相乗効果を最大限に発揮することによって、教育の内容に「厚み」をつけます。

知力にくわえて、人間力と国際的な力を鍛え、たくましい交渉力と大胆な行動力を備えた東大生を、さらに多く輩出していきます。

世界から日本へ、日本から世界へ

今日人々が直面している課題は、グローバルな関係の中で存在しています。東京大学の教育研究活動は、世界とのかわりなしには成立しえず、また、その成果は、広く人類全体に享受されることが期待されているものです。

海外からの留学生や研究者の受け入れを拡充すべく、体制を強化します。アジアをはじめ世界の人々に対して知の公開を行い、かつ、知の創造のための多様性を拡大します。

日本人学生のさらなる国際化は決定的に重要です。日本人学生に、語学学習、国際経験、留学生との交流の機会などを、拡大します。

着実に、そして大胆に



「旗艦大学」の自負と広範な連携

東京大学は、日本の学術と高等教育の発展の先頭に立つ「旗艦大学」として、大きな責務を負っています。そうした責務は、何よりも東京大学自らの誇りある教育研究活動によって果たされていくべきものです。社会がさまざまな課題を抱えていることに対して、東京大学は、新たな学術的価値を創造し、多様な教育と研究のプログラムを構築していくことで応えていきます。東京大学の学術のウィ

ングは、現在と未来だけではなく過去にも広がっています。未来に開かれた知の可能性に対する果敢な挑戦とともに、歴史に鍛え上げられた多彩な学問分野を、時の制約を越えて確実に発展させ続けることは、学術の基盤を豊かなものとし、創造性を生み出す源となると考えています。

言うまでもなく、「旗艦大学」という存在は、単独で成り立つものではありません。

多くの国公私立大学や産業界、国、自治体、市民等も含めた社会との広範な連携は、知の広がり、知の多様性、知の創造のために不可欠なものです。私は、日本と世界とを問わず、多くの大学や社会の諸分野との積極的な連携を推進することで、東京大学が「知の公共性」を全面的に発揮できるような環境を整えたいと考えています。

総長のリーダーシップ。 強い本部と強い部局、強い個人

総長のリーダーシップは、教職員学生がもっている力を最大限に引き出しながら大学全体を動かす力にあると考えます。教職員学生一人一人が優れた力を有している東京大学は、しなやかなリーダーシップを発揮するにふさわしい組織です。この考え方を踏まえて、強い個人、強い部局を基盤とした強い本部組織を運営します。

二兎を追う

学術においては、基盤的なディシプリンの教育研究の拡充と、先端的・融合的な教育研究へのチャレンジとに、ともに取組みます。業務運営においては、安定性のある正確さと、柔軟かつ挑戦的であることを、ともに目指します。長所と長所の組み合わせを大胆に試み、その相乗効果を生み出します。

スリムな組織、スマートな運営、 スピーディな業務

組織改革、業務改革の一層の推進とコンプライアンスの徹底を図ります。スリムな組織による効率的な経営によって教職員の創造的活動のための時間を生み出すとともに、国立大学法人にふさわしい、スマート（賢く洗練された）でスピード感のある業務運営を目指します。

財源の多様化と資産の有効活用

多様な財源の確保とその機動的な運用によって、高度な水準の教育研究活動を確実に担保していきます。施設、敷地等の資産は、計画の最適化とともに、多様な開発手法を用いることによって、有効で迅速な活用を図ります。また、施設等の適正な管理をすすめます。

The
incumbent

